

「紀要」の存在意義について

今回初めて「国際文化」を手にとってみた。もちろん「国際文化」が国際文化交流学部の紀要として存在していることは知っていたが、それに目を通す機会もなく2年が過ぎてしまったということである。

昨今、工学系の学部では紀要がほとんど刊行されなくなった。私が、金沢大学に赴任した25年前には、まだ工学部には紀要が存在していた記憶がある。それがいつの間にか廃刊となってしまった。思うに、紀要に掲載された論文が、研究業績として次第に認められなくなったためだと考えられる。いまではElsevierやSpringerといった大手出版社が発行する国際学術誌が幅をきかせ、日本の学会が発行する学術誌も苦戦を強いられている。膨大な数の学術誌の質の定量化と序列化は多くの人にとってかなり魅力的に映るらしい。いわゆるImpact FactorとかSCI論文などの言葉が飛び交い、工学系アカデミアはまさにこれらの数値が乱舞する戦国時代の様を呈している。それは定量化、序列化に止まらず、本来自由な討論の場であるべきところが、政治的思惑に影響を受ける場に変貌しつつある。例えば、二酸化炭素と地球温暖化の因果関係を否定したりする論文は今日その発表が極めて難しい。また、誰があるアイデアの最初の提案者であるかについても、悪意ある論文を多数投稿すれば、真の歴史を塗り替えることさえ可能となる。

そのような中であって数学の分野だけはいまだに紀要が高く評価されている。一つには数学者の数が工学者に比べ圧倒的に少なく、この分野で商業ベースの学術誌を維持するのが難しいためであろう。集団の母数が少ないと、序列化や政治力学が介入する可能性が少なくなる利点もある。東北大の紀要である「東北数学雑誌」などは世界的に高い評価を確立している。いまや理系の分野では、数学だけが健全なアカデミアの体質を維持しているようにさえ見える。本学の「国際文化」も、もっと学外に門戸を開放し、他大学との交流を活発化させる選択もあるのではないだろうか。半世紀後の「国際文化」が、「東北数学雑誌」のようになっていることを想像するのは楽しいことである。

2020年11月3日

公立小松大学
副学長、生産システム科学部長 木村繁男